

宝物はすぐそばに

校内研通信

第 17 号

R7.10.8

発行者:校内研担当 仲村智

第 2 回全体授業研究会（教科総合訪問）を振り返って

◎主な成果と学び

・ **「子どもがどう学んだか」を問う視点の浸透** 「視点生徒」を設けるアプローチが教員間に定着し、教科の専門性を越えて生徒の学びの過程を具体的に捉えることができました。参加者からは「自分にない視点を見つけることができた」との声が寄せられ、生徒のつぶやきや表情から手立ての有効性を深く検証する文化が育っています。

この視点の共有は、まさに本校テーマ『学ぶ楽しさを見いだす授業づくり』の根幹をなす成果です。

・ **建設的な対話を生むワークショップ形式の確立** ファシリテーターを配置したワークショップ形式の意見交換会が、参加者一人ひとりが安心して意見を発信できる場として機能しました。付箋を用いて意見を可視化し構造的に議論を深める手法は、「スムーズに話し合いができた」と好評であり、授業者を評価するのではなく、参加者全員で生徒の学びを軸に授業を分析する協働的な研究文化の醸成に繋がりました。

・ **日々の実践に繋がる具体的な授業技術の共有** 3名の授業者による実践からは、日々の授業改善に直結する具体的な工夫が多く共有されました。特に、生徒が課題意識を持つための明確な「めあて」の提示、思考を深める効果的な「発問」、安心して発言できる温かな「雰囲気作り」、関心を引きつける写真や音声、ロイロノートといった ICT の効果的な活用など、多岐にわたる手立てが参加者の大きな学びとなりました。

これらの成果は、本校の研究テーマである「学ぶ楽しさを見いだす授業づくり」を着実に前進させる力となるものです。

◎今後に向けた課題と展望

・ **「個」から「チーム」への授業準備体制の移行** 研究授業の準備が授業者個人の負担に偏りがちであったという反省点が挙げられました。今後は指導案の検討段階からチームとして協働で検討し試行錯誤していく過程そのものを全教員の学びの機会と捉え直し、より組織的に関わる体制を構築する必要があります。

・ **活動の質を高める「机間指導」と「課題設定」の探究** グループ活動が定着しつつある今、次なるステップとして、活動中の「机間指導」の質的向上が課題です。生徒の思考を促す声かけのあり方や、活動そのものをより深めるための効果的な課題設定について、全校で知見を共有し、研究を深めていく必要があります。

これらの課題に全教員で向き合い、次なる実践へと繋げていくことが、本校の研究を一層深化させる鍵となります。

・ **全教員の専門性向上を促す運営役割の分担** 意見交換会における司会やファシリテーターといった役割を、より多くの教員が経験できるようローテーション制を検討すべきとの提案がありました。これは、一部の教員への負担軽減だけでなく、全教員の会議運営能力やファシリテーション能力、すなわち教員一人ひとりのスキルアップに繋がり、研究活動全体の活性化に貢献すると期待されます。

・ **指導助言の時間を確保するための時間配分の見直し** 参加者から、島尻教育事務所の指導主事による指導助言の時間が短いという意見が複数寄せられました。70分という限られた時間の中で、グループ協議と、専門的知見から深い学びを得る指導助言の双方を十分に確保できるよう、全体の時間配分を再検討します。

◎結び

最後になりましたが、質の高い授業を公開してくださった城間 優華先生、沼野小百合先生、金城 久徳先生に心からの敬意と感謝を申し上げます。今回の研究授業で得られた多くの学びと課題を全教員で共有し、日々の授業実践に活かしていくことで、引き続き『学びに向かう生徒の育成』という研究テーマの実現に向けて邁進していきましょう。

